様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 23 年 5 月 31 日現在

機関番号：３２６７５
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2008～2010
課題番号：２０５２０３０４
研究課題名（和文）**西欧中世文化を捉え直し今日的意義を呈示する―フランス現代思想に基づきながら**
研究課題名（英文） Reconsider the Occidental medieval culture and show its contemporary significance - according to the French modern thought
研究代表者
酒井　健（SAKAI TAKESHI）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：70205706

研究成果の概要（和文）：フランス現代思想、とくにジョルジュ・バタイユ(1897―1962)とミシェル・フーコー(1926―1984)の思想に拠りながら、西欧中世文化の諸相を捉え直し、未開拓の面を抽出した。とりわけ、中世の神学思想、文学、図像表現の分野に注目し、それぞれの創造者と享受者において、語りえぬ情動が重要な役割を果たしていることを明らかにした。今日的な意義としては、文字になって顕在化している資料にのみ依拠して過去の文化を見る近代の実証主義的歴史研究に反省を迫るとともに、今日の我々の文化を捉える際にも、矛盾や変化のため文字表現になりえない人間の不分明な心情へ柔軟で辛抱強い眼差しを差し向けることが必要であることを示唆した。

研究成果の概要（英文）：According to the French modern thought, especially to the philosophy of Georges Bataille and Michel Foucault, I reconsidered several aspects of the Occidental medieval culture and pointed out their unexplored characteristics. Particularly in the field of Theology, Literature and Iconography, I presented the influences of indescribable affections animating creators and appreciators in the Middle Ages. The contemporary significance of this study consists in two suggestions. It suggests that the modern historical studies should reflect on their positivistic method based exclusively on the literal documents and that, for understanding our contemporary cultures, we should give flexible and patient attention to human dark affections, which are too contradictory and changeable to be seized by the literal expression.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学を除く）・仏文学
キーワード：フランス現代思想、西欧中世文化、バタイユ、フーコー、ロマネスク芸術、武勲詩、神秘神学、騎士道文化。

1．研究開始当初の背景

（1）　既存の中世文化研究への疑問がまずあげられる。これまで西欧で行われてきた中世文化研究は、文字に記されて残存した資料を中心に進められてきた。この文献中心の研究では、大多数の人間が無文字の生活を営んでいた中世の真の文化の在り様は捕捉できないのではないかと私は疑問にかられた。

（2）　私がバタイユの研究を進めていたときに、この思想家の中世研究が中世人の情動と声の文化に注目していることに気が付き、ここから出発して中世への問いかけを発展させれば、現代の中世文化研究に新たな視点を与え、新たな視野を切り開けるのではないかと思われた。

（3）　おなじく『言葉と物』などのフーコーの初期の著作を読んでいるときにも、フーコーの思索が、近代の文字中心の文化史研究の在り方への私の疑問、問題意識と重なるところがあるように思われ、彼の考察も参考になると思われた。

（4）　中世のキリスト教化は人口の大半が占める農村部においては表面的にしか進捗しておらず、キリスト教と異教（自然崇拝）の二層構造をなしていたが、文字の資料はキリスト教系の都市の少数住民である聖職者と知識人によって書き残されたものがほとんどであり、農村部の文化に関して、そしてまた農村部からの移民で成り立っていた都市部の文化に関しても、表面的、あるいは偏った情報しか提供できていない。これを鵜呑みにして中世像を立ちあげる近代の歴史研究は危険をはらんでおり、その点、キリスト教を相対化し、また近代の知識人の動向を批判的に眺めていたバタイユとフーコーの仕事は、中世文化を捉え直すにあたり参考になると思われた。

（5）　他方で、バタイユが 1946 年に創刊したフランスの書評誌『クリティック』の最近の特集号「情動の中世」（2007 年 1－2 月号）も当研究への背景として付加しておきたい。これまでの西欧の中世研究の文献中心主義を告発し、文字になりにくい中世人の情動へ研究者の視線を差し向けようとするこの特集号の基本主張は、研究の始点として刺激になり、より深く広い次元へ研究を進めたいと意欲をかきたてられた。

（6）　さらに付言すれば、2000 年に上梓した拙著『ゴシックとは何か　－　大聖堂の精神史』(講談社現代新書、のちにちくま学芸文庫に再録）の第 1 章で展開した中世民衆と聖職者の文化創造の考察をさらに発展させたいという意図が当研究の背景にはあった。

2．研究の目的

（1）　中世文化に関する聖職者や知識人の文字の証言を相対化して、大多数の中世人が中心になって織りなす無文字の文化へ研究の眼差しを向ける

（2）　とりわけ、神秘神学、武勲詩、ロマネスク教会堂や黙示録写本に記された図像表現に注目して、無文字文化の活力である民衆の情動を探査し、神学者や知識人へのその影響を割り出していく。

（3）　あわせて、そのような新たな中世文化研究の成果を中世研究だけに閉じ込めず、近現代人の文化理解において意識変革を促す縁（よすが）にしていく。語りえぬ情動の文化的意義について示唆を与える。

3．研究の方法

（1）　テクスト解読＝まずバタイユとフーコーの論文を注意深く再読することから始めた。バタイユに関して言えば、1922 年パリの古文書学校に提出された彼の卒業論文レジュメ、『シュルレアリスム革命』誌（1926 年）に掲載された中世詩ファトラジーの彼の現代語訳、『ドキュマン』誌第 2 号（1929 年）に発表された彼の論文「サン・スヴェールの黙示録」、『クリティック』誌に発表された彼の論文「中世のフランス文学、騎士道道徳と情念」(1948 年)、そして『ジル・ド・レ訴訟録』(1959) に寄せた彼の「序文」を精読することをおこない。他方で、フーコーの初期の歴史書『狂気の歴史』（1961 年)、『言葉と物』（1966 年)、『監獄の誕生』（1971 年）を丁寧に読み込んだ。

（2）　実地踏査＝続いて、フランスに赴いて、ロマネスク教会堂を訪れ、そこを飾る図像表現をつぶさに鑑賞した。とりわけノルマンディー地方のタンなどの小さな村々の教会堂からは中世民衆の文化意識が伺われ、おおいに参考になった。

（３）　資料調査＝ノルマンディー地方に注目した理由としては、そこがロマネスク研究の先進地域だったこともあげられる。19 世紀初めにノルマンディー好古学協会がこの地方の中心都市カンに設置され、機関誌も発刊された。カン大学図書館にはこの機関誌が創刊号からすべて保存されていて、「ロマネスク」概念の生みの親シャルル・ジェルヴィルやその後継者アルシス・ド・コーモンの論文、報告書、書簡を渉猟することができた。

（４）　図版調査＝資料調査という研究進捗の方法に関しては、パリにある国立図書館に赴いて、バタイユが論じた「サン・スヴェールの黙示録」写本を調べ、とりわけその多量の挿絵図版を検証できたことも重要な意味を持った。

３．研究成果

（１）　言語の二重性＝ソシュール以降の近代言語学では、言語はそれが指し示す対象と別個の差異の記号体系であることが定説化しているが、この視点がはたして中世の言語に当てはまるのかという疑問から出発した。そして書き言葉ではなく、話し言葉を中心に文化を形成していた中世の大多数の人々において、言語は、たしかに差異の体系としてあるものの、他方で、指示対象と内密な関係を取り結んで存在していること、つまり自律的体系性と対象との連絡性を持つという二重性を持っていたという結論に達した。差異の自律的体系性と同時に、指示する対象と何らか内的な関係を取り結んで存在する中世独自の言語観を、バタイユ、フーコーの言語観、歴史観を援用して、説明し、論文「ジョルジュ・バタイユと中世の言語」（『言語と文化』第 6 号）にまとめた。さらに中世の文学表現とりわけ武勲詩、さらに中世の神学とりわけ神秘神学にも、この言語の二重性が影響を与えていることを、バタイユの発言から割出して、精査し、論文にまとめた（『バタイユ』青土社、第 5 章「中世」）。

（２）　次に、中世の図像表現においてもこの言語の二重性とおなじことが言えるのではないかと考えた。キリスト教の象徴主義に従って制作されたとされる教会堂の装飾彫刻や聖書写本の挿絵においても、単に記号表現として存在しているだけではなく、対象との内密な関係を取り結んで存在していたと結論した。その内密な関係は、多くの場合、キリスト教の狭い道徳的教義から逸脱する自由奔放さを特徴にすることを、とりわけは中世のロマネスク教会堂を実地踏査し、また写本挿絵をじかに観察することによって、確認した。それら教会堂の装飾彫刻や聖書写本挿絵においては、自然界の動植物たち、幻想的な神話上の存在たち、あるいは日頃目にする人間たちが、外面の形態をあえて破壊して、内面の情動、欲望、力を表出させ、他の存在と内的に交わろうとしていること、そうした動きに中世の図像制作者、一般の鑑賞者、さらには理念的に対立しているはずのキリスト教関係者もが深く共感していることを、こちらも深く実感し、確認した。

（３）　他方で、ロマネスク（フランス語ではロマン＝roman）なる美術史概念を創案した 19 世紀のノルマンディー地方の学者シャルル・ド・ジェルヴィルの考察、および彼の後継者でこの概念を広めたアルシス・ド・コーモンの研究を精査して、この概念の誕生を促したものが、ほかならないこの中世図像の二重性にあることを突き止めた。そしてこの考察を、貴重な図版資料も交えながら、論文「ロマネスク概念の誕生」（『言語と文化』第 7 号）にまとめた。

（４）　バタイユの中世研究の現代的な意義については、国内と国外の両方において研究成果を発表した。日本の国内においては上記の論文発表と書物の出版、さらに朝日カルチャーセンターの講座によって、多くの人に研究成果を問いかけた。国外においては、中世文学の専門家たちを対象にした学会において、11 世紀の聖書写本「サン・スヴェールの黙示論」に関するバタイユの論文の斬新さと現代性を伝えた。「中世の現代性」というこのフランスの学会名は私の今回のテーマと整合性を持ち、スイスのローザンヌ大学での国際学会に集まった研究者たちからは、好意的な評価と指摘をいくつもいただいた。バタイユの解釈が中世言語の二重性に基づく点、そしてそれが近代の中世研究者たちだけでなく、現代の文化考察者にも開明的な刺激になる点を、発表したのである。フランス語でなされたこの学会発表は、

2011 年度中にはフランスで論文集に収められ公刊される予定である。なお、この原稿を日本語に訳し、加筆改稿して発表したものが、論文「「サン・スヴェールの黙示録」とジョルジュ・バタイユ　－　「非-知」の哲学者における中世研究の意義」（『言語と文化』第 8 号）である。日本の読者への研究成果の伝達をこれにより果たした。

（5）　なお、語りえぬ情動の体験とバタイユの思想、この体験におけるバタイユとフーコーの関係も、それぞれ論文にまとめて研究成果を公表した。「ワイン一杯とバタイユの無のエコノミー」（『大航海』第 71 号）、および「フランス現代思想　－　バタイユからフーコーへ」（『社会思想史』第 6 部第 5 章）がそれである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

① 酒井健
論文題名：「サン・スヴェールの黙示録」とジョルジュ・バタイユ　－「非-知」の哲学者における中世研究の意義について
雑誌名：『言語と文化』（法政大学　言語・文化センター紀要）
査読の有無：無
巻号：第 8 号
発行年：2011 年
頁：1-28 頁

② 酒井健
論文題名：ロマネスク概念の誕生
雑誌名：『言語と文化』（法政大学　言語・文化センター紀要）
査読の有無：無
巻号：第 7 号
発行年：2010 年
頁：1-41 頁

③ 酒井健
論文題名：ワイン一杯とバタイユの無のエコノミー
雑誌名：『大航海』
査読の有無：無
巻号：第 71 号
発行年：2009 年
頁：106-114 頁

④ 酒井健
論文題名：ジョルジュ・バタイユと中世の言語
雑誌名：『言語と文化』（法政大学　言語・文化センター紀要）
査読の有無：無
巻号：第 6 号
発行年：2009 年
頁：1-30 頁

〔学会発表〕（計１件）

① 酒井健
発表題名：Le sens de l'érudition chez Georges Bataille – autour de son interprétation de l'Apocalypse de Saint-Sever
学会名："Le savant dans les lettres", VIe colloque international des « Modernités médiévales »
発表年月日：2010年10月22日
発表場所：スイス、ローザンヌ大学

〔図書〕（計２件）

① 酒井健、他合計 8 名（酒井健の論文はそのなかの 8 番目）。
出版社：法政大学
書名：社会思想史
発行年：2011 年
総頁：434 頁（このうち担当したのは第 6 部第 5 章「フランス現代思想　－バタイユからフーコーへ」、417 - 432 頁）

② 酒井健
出版社：青土社
書名：バタイユ
発行年：2009 年
総頁：380 頁（このうち直接に本研究に関係するのは第 5 章「中世」、240-347 頁）

６．研究組織
(1)研究代表者
酒井　健　（SAKAI TAKESHI）
法政大学・文学部・教授
研究者番号：70205706

(2)研究分担者
なし